

ふるえることば、脱臼する語り
—川端康成『雪国』の文体論的分析の試み—

平井 裕香

要旨

『雪国』の地の文は、女を性的或は美的な対象の位置に押し込める一方で、自己を唯一の主体として特権化しようとする欲望を作中人物・島村と共有しながら、このホモソーシャルな共犯関係を「島村」という三人称の符牒により隠蔽する。そのような志向性を持つ語り手・島村の言葉に対して〈他者の言葉〉としてあると言える駒子・葉子の台詞は、地の文の言表行為の主体と主たる言表の主体たる島村の特異な関係ゆえに、語られる物語と語り手・島村の水準の差異を越えて地の文を逆照射する。二つの異質なコード・文脈の間でことばがふるえるとき、そしてそのふるえがテキストの他の位置にある同一語を介してテキスト全体に及ぶとき、語り手・島村のコード・文脈の偏向及びその背後にある志向性が露になる。『雪国』というテキストは、〈他者の言葉〉がこのように語りを脱臼させる過程をこそ提示している。以上のような複数の言葉の相互作用が織りなす動態をテキストの文体と呼び、作中人物の台詞を射程に含めた議論をこそテキストの文体論的分析と呼ぶならば、それは川端テキスト群及びそれを囲い込む言説の再検討において大きな方法論的意義を有すだろう。

キーワード：川端康成、『雪国』、文体、地の文と台詞、他者の言葉

1. はじめに

テキストの文体論的分析が、テキストを織りなすことばの総体を分析することを意味するならば、それは語りの表現上の特徴と志向性を明らかにするのみならず、ことばが折り重なるというテキストの運動の中でその特徴が変容を蒙り、志向性が抵抗を受けるさまを描写するものでなければならない。あることばを、それが「」に括り込まれているからといって除外してはならない。作中人物の台詞も、地の文によって語られる物語世界内の出来事の一つでありながら、テキスト上での物質的顕現としては地の文と等価であるというそのアンビヴァレントな位置づけとともに議論の射程に含み、地の文と同じだけの、或はそれ以上の感度をもって取り扱うものでなければならない。そして、複数の言葉——語り手の言葉と作中人物の言葉——の相互作用という動態をこそ、テクス

トのかたち、すなわち文体とみなさねばならない¹。

川端康成の『雪国』は、日本近代文学の正典的作品としての特権的地位を保証される一方で、その独我論的閉鎖性を糾弾され棄却されつつある²が、一見相反する方向性を有する両言説の背後にあるのは、受容史の中で構築されてきた固定的で支配的な読みである。そのような読み、文章表現の〈美〉や技巧的卓越性を賞揚するという地の文中心主義、複数の雑誌に分載された短編が多くの改稿を経て、また結末部分を新たに追加されて、敢えて一つの中編にまとめられたという経緯を無視するような筋の軽視³、及びテキスト分析と作品評価における前半偏重⁴といった偏向があることは、膨大な先行研究を一望すれば容易に看取される。このような偏向は、先に述べた意味での文体論的分析の不在の帰結でもあり、それをもたらすものでもあろう。『雪国』というテキストを、それが嵌め込まれた特異な枠から解放し、一層の批評的吟味に開くためには、文体論的分析が不可欠なのである。

本稿は、以上の問題意識をもって『雪国』の文体を論じる。第二章では、先行研究を参照しながら、地の文の表現上の特徴、志向性、及びその言表行為の主体（語り手）が主たる言表の主体である作中人物・島村との間に取り結ぶ関係を明らかにする。第三章では、それらを前提に、ことばが二つのコードと文脈の間でふるえるさま、台詞が地の文の語りを脱臼させていくさまを描出する。第四章では、以上の分析の実践を踏まえ、文体論的分析、特に台詞への着目の方法論的意義を考察する。最後に、「十六歳の日記」を媒介に、川端テキストの群及びそれを囲い込む言説を文体論的分析という方法によって再検討する可能性を示唆することをもって、本稿の結びに代える。

2. 語りの志向性、地の文と台詞

『雪国』の語りについては、多くの研究・批評言説が提出されてきた。現行の形をなす前の諸短編⁵が発表されていた当初から、既に文章上の技巧、特に所謂〈省筆の美〉が注目を集めた⁶。論証よりも印象に基づいた批評が膨大にある一方で、文体論・表現論は本格的な『雪国』研究の嚆矢となるとともに、現在に至るまでその主要な流れを形成している⁷。

これら先行研究が明らかにしてきた『雪国』の語りの表現上の特徴は、〈認識未完〉の表現とまとめることができるだろう。根岸正純は、①知覚未完の表現、②凝視と詠嘆の表現、③驚きの表現を、『雪国』及び『山の音』に特徴的な表現として挙げている⁸。これら諸特徴は、物語世界内部において生起する出来事に対し十分な認識を持ち得ぬ、また持とうとせぬ作中人物としての島村の知覚・凝視と詠嘆・驚きを地の文の語り共有することによって、換言すれば、島村の認識の不完全さを語り手が敢えて補わぬことによって、実現されている。『雪国』の語り手は、多くの場合、物語のいま・ここにある島村の不完全な認識や感傷に密着して実況中継者的に語るのみであって、それらを対象化

し、分析し、解釈することは極めて稀なのである。

このような語りは、全知の語り手が作中人物の関係や心理を詳らかにする、正統的三人称小説的な語りとも、語り手の回想や内省、葛藤の告白を主とする私小説的な語りとも、性質を異にしている。「島村は…」という表現に明らかなように三人称の装いを持つてはいるが、語り手の視線が島村以外の内面を照らし出すことはなく、語りには大きな偏差がある。島村を含む作中人物の来歴や関係性、及び心理が謎のままに置かれて不自然でないのはこのためである。また、島村の知覚に寄り添っているという意味で一人称的であるが、一人称小説に多く見られる、語る「私」による語られる「私」の対象化・相対化はなされず、それに不可欠なはずの物語の時間と語りの時間の間の隔たりが明確にされることも稀である。語る「私」（言表行為の主体）と語られる「私」（言表の主体）の距離は、概してあまりにも近い。『雪国』に語る「私」がいるとして、彼は告白も分析もしない。主人公島村に同伴し、彼の言動や心理を逐一解釈し、読者に解説するのでもない。要するに、語り手が島村であるか別の誰かであるか——『雪国』の語りが三人称であるか一人称であるか——という問いは重要ではない。むしろ問題の所在を誤認させる問いである。『雪国』の語りの特徴は、物語世界内部に生きるはずの島村と、外部に位置するはずの語り手との、テキストの大部分においては不可分なまでの、癒着である。

典型的な一節を挙げよう。

夕景色の鏡のなかで葉子にいたわられていた病人は、島村が会いに来た女の家の息子だったのだ。

さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたやうに感じたけれども、このめぐりあはせを、彼はさほど不思議と思うことはなかつた。不思議と思はぬ自分を不思議と思つたくらゐのものであつた。(16-17)

引用第一文が語るのは、一見物語世界内の事実関係のようでありながら、その実番頭の話聞いた島村の感慨である。出来事が島村の目に映じたままに語られること、人間関係が島村を中心に把握されることに加え、「のだ」という島村の詠嘆を写し取るような文末表現が、そのことを証している。その結果第二段落において、島村は「彼」のみならず「自分」とも名指されることとなり、島村の胸を通り過ぎた「なにか」は語りの上でも未分化な直観のままにおかれる。しかし、「くらゐのものであつた」という部分には語り手のイントネーション——四人の「めぐりあはせ」を島村が不思議と思わぬことの不思議さに強勢を置く態度——が滲み出ている。地の文の言表行為の主体は、言表の主体との距離を恣にしながら、時に自らの評価をこのように物語世界に介在させるのだ。

したがって、語りの一人称性を殊更に強調し、語り手と島村の関係を〈一体化〉に単純化することには、深刻な問題がある。それは、例えば「無論ここにも夕景色の鏡はあ

つたであらう。今の身の上が曖昧な女の後腐れを嫌ふばかりでなく、夕暮の汽車の窓ガラスに写る女の顔のやうに非現実的な見方をしてみたのかもしれない。」(23-24) といった明らかな反例——未だ〈夕景色の鏡〉を経験していない物語現在の島村と地の文の語り手が一体化しているとすれば、「夕景色の鏡」「夕暮の汽車の窓ガラスに写る女の顔」という表現が出てくるはずはなく、ここでは物語の時間軸と語りの時間軸が別個のものとして存在し、後者こそがテキストの時間的秩序をなしていると言える——がテキストに散見されるというような、表層的なレベルに留まらない。それは語り手が島村との間にとる距離の恣意性を、またその裏にある語りの志向性を、隠蔽することになる⁹。

中山眞彦は、『雪国』の地の文の言表行為の主体と言表の主体のこのように特異な関係を、「作中人物（発話内容の主体）の行為（見る、感じる）とテキストの執筆者（発話行為の主体）の行為（書く）がひとつに重なっている」¹⁰と端的に述べた上で、テキストを、「純粹な私意識」¹¹としてある書く行為の主体が、島村という虚構の名を徐々に放棄しより直接的に自己を表現していく過程、言語による「美」——「ひとつの主体的体験、すなわち自我をより普遍的なものへ向けて超克するという救済の体験」¹²——の創造に重心を移していく過程と見る。根岸が川端文学の「美的情趣」の源泉とみなした「駒子や菊子が演じ見られている」現実世界と「島村や信吾が見ているだけの」美的世界という「異次元の世界」の間での「移調」¹³を、テキストを貫くひとつの展開として見た点、またそれによってテキストを通しての語りの様態の変化に注意を促した点で、中山の論は特に有意義であったと言えよう。

語りの志向性を、語られる対象すなわち駒子と葉子との間にそれが取り結ぶ関係という観点から問い直したのが、小森陽一である¹⁴。小森はまず、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」(9) という冒頭の一文の分析から、島村という作中人物との微妙な共犯関係の中で自らの判断を物語世界に介入させながら、自己のそのような位置を隠蔽する地の文の言表主体のありかたを明らかにする。その上で、以下の結論を導く。

実は、島村がもっとも恐れていた、あるいは忌避していた、ないしは島村とこの『雪国』の語り手、発話主体が共犯関係を結びながら、この『雪国』の世界からいわば追放しようとしたもの、いや、というよりも、島村と共犯関係を持ちながら回避しようとしたのは、それは、この葉子から眼差されること、女から男が見られてしまうこと、これを回避していく物語として、『雪国』は成り立っていると思います。¹⁵

つまり、地の文の語り手と島村は、女を性的或は美的な対象の位置に押し込める一方で、自己を唯一の主体として位置づけようとするホモソーシャルな欲望を、そしてまたその欲望に侵されたまなざしと言葉を共有している。「島村」という三人称の符牒は、語り手と島村の間の距離を偽装することによりこの共犯関係を隠蔽する。そして、地の文が、

作中人物の来歴や関係性や心理の分析・解釈・説明の空白に重ねることばは、語り手・島村の言葉のコード・文脈を強化する機能を持つ。

『雪国』に多く見られる風景描写は、そのようなことばの典型であろう。例えば、駒子と生命力に溢れた自然、特に杉との連想関係が巧みに形成される。初対面で「山々の初夏」(19)と結びつけられた駒子は、島村が「若葉の匂ひ」に誘われて登った裏山の「杉林」の陰に立っている(27)。杉林の奥へと島村を導いた駒子の「首に杉林の小暗い青が映るやう」であり、「杉林の陰で彼を呼んでからの女」すなわち駒子は、島村には「なにかすつと抜けたやうに涼しい姿」に見える(29)。そしてこの後、二人は初めての性的接触を持つに至るのだ。このように風景描写がつくり出す連想関係は、語り手・島村が見る／語るとおりに、駒子と葉子に性的或は美的な象徴性を読むことを読者に強いるパフォーマンスであると言える。

ところで、上で引いた先行研究は「文体」論、「文体」分析を標榜しながら、「」に括られたことば、すなわち作中人物の台詞を議論の埒外に置いている¹⁶。しかし、地の文が島村という作中人物と言葉を共有しているならば、地の文の言葉が島村を介して物語世界内で発せられる言葉の逆照射を受け得るであろうことは想像に難くないし、事実『雪国』には、特にテキスト後半には、そのような瞬間が散見されるのである。詳細な分析は後に譲るが、最も典型的な場面を挙げよう。

「あすこへ行ってみようか、君のいひなづけの墓が見える。」

駒子はすつと伸び上つて島村をまともに見ると、一握りの栗をいきなり彼の顔に投げつけて、

「あんた私を馬鹿にしてんのね。」

島村は避ける間もなかつた。額に音がして、痛かつた。

「なんの因縁があつて、あんた墓を見物するのよ。」

「なにをさう向きになるんだ。」

「あれだつて、私には真面目なことだつたんだわ。あんたみたいに贅沢な気持ちで生きてる人とちがふわ。」

「誰が贅沢な気持ちで生きてるもんか。」と、彼は力なく呟いた。

「ぢやあ、なぜいひなづけなんて言うの？ いひなづけでないつてことは、この前よく話したぢやないの？ 忘れてんのね。」

島村は忘れてみたわけではない。

…

まして、駒子がちやうど島村を駅へ見送つてみた時に、病人の様子が変つたと、葉子が迎へに来たにかかはらず、駒子は断じて帰らなかつたために、死目にも会へなかつたらしいといふこともあつたので、尚更島村はその行男といふ男が心に残つ

てみた。

駒子はいつも行男の話 avoided が。いひなづけではなかつたにしても、彼の療養費を稼ぐために、ここで芸者に出たといふのだから、「真面目なこと」だつたにちがひない。(93-95)

「真面目なこと」に付された引用符がまずもって注意を惹く。引用後半の地の文一段落目は、「島村を」「島村は」という三人称表現によって島村から距離をとっているかに見えるながら、「死目にも会へなかつたらしい」とあくまで島村の不完全な認識に寄り添う。ここでの心理描写を引き継ぐようにして、二段落目は島村の心理を自由間接話法的に、すなわち明白な符牒なしに島村の心内語を生そのまま写し取る形で語る。地の文の語り手と島村の間の距離が、極めて近くなる点であると言っていい。「真面目なこと」に付された引用符は、「避けたがる」という現在形表現とともに、そのことを証している。ではどこからの引用なのかと言えば、「あれだつて、私には真面目なことだつたんだわ。」という駒子の台詞である。つまり、駒子の発言への島村の心理的反応をなぞることによって、地の文は「真面目なこと」という駒子の台詞、すなわち物語世界内で発せられた言葉を、自らの内に呼び込んでしまう。『雪国』というテキストにおける地の文の言葉と作中人物の言葉は、物理的顕現として等価であるというだけでなく、このように語られる物語と語る言葉のレベルの差異を越えて浸透し合う。そしてこの相互浸透が、地の文の志向性とパフォーマンスの完遂を、テキストの統御を、不可能にするのだ。

3. ふるえることば、脱臼する語り

語り手の言葉（及びこれとコード・文脈を共有する島村の言葉）に対し駒子と葉子の台詞は〈他者の言葉〉としてあると仮に言うとするれば¹⁷、『雪国』にまつわる二次的言説の多くはこの〈他者の言葉〉を閑却する点において島村・語り手の言葉の側にあった。この事態はまさに日本近代文学のホモソーシャルな構造¹⁸の産物であり、例えば「『雪国』とは、「他者」にけっして出会わないようにするために作り出された「他の世界」である。」という『雪国』批判は、この点に限定して言えばそれ自体がテキストから〈他者〉を消去しているのだ。テキスト上での言葉のせめぎ合いの外部に身を置き、自己の言葉を一分も揺らがさぬその態度は、「いつでもそこ [トンネルの向こうの世界としての雪国 (引用者註)] から引き返すことができる旅行者」であり、「傷ついた女たちを冷徹にながめ」ながら「自己意識は揺るぎもしない」島村と同程度に、あるいはそれ以上に、〈他者〉に対して閉ざされている¹⁹。これに対し、本稿がこれから見ていくのは、あることばが語り手・島村のコード・文脈と駒子・葉子のコード・文脈の間で揺らぎ、その意味内容をずらされ、それゆえ語りの志向性が妨害され、暴かれるさまである。テキストのそのような動態は、読者の言葉もまた試すだろう——不安定なことばとの絶え間ない対峙にお

いて、自らの言葉の位置取りを問われることになるのだから。

先に挙げた場面との比較が興味深いのは、テキスト前半の次の場面である。

「君はあの時、ああ言つてたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。さうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。後でも笑やしなかつたよ。」

…

その顔は眩しげに含み笑ひを浮べてゐたが、さうするうちにも「あの時」を思ひ出すのか、まるで島村の言葉が彼女の体をだんだん染めて行くかのやうだつた。女はむつとしてうなだれると、襟をすかしているから、背なかの赤くなつてゐるのまで見え、なまなましく濡れた裸を剥き出したやうであつた。(34-35)

「真面目なこと」が駒子の台詞からの引用であつたのに対し、「あの時」は島村の台詞からの引用である。「あの時」ということばは島村・語り手のコード・文脈に閉じ込められ、限定的かつ一義的な意味内容を与えられるとともに、指示対象の曖昧さへの微かな違和感を置き去りに、読者を島村・語り手のコード・文脈に巻き込んでいく。そしてこのように意味を固定・強化されたことばは、駒子の身体を赤く染め、彼女を性的対象とするに十分なのである。

このような引用表現に限らず、『雪国』には同一語の反復が目立つ。繰り返されることばを鍵概念或は主題とみなし、それを起点に作品全体の解釈を試みる論は多い²⁰が、本稿は同一語の反復が果たす機能にこそ注目したい。それは一つには、ことばを自己のコード・文脈に閉じ込めるパフォーマンスである。この側面が顕著なのは、「徒労」ということばをめぐる場面(37-38)である。読んだ小説を逐一書き留める自身の習慣への「徒労だね。」という島村の評価に対する「そうですね。」という駒子の「こともなげに明る」い応答と真直ぐなまなざしは、駒子のコード・文脈における「徒労」の意味内容或はコノテーションが島村・語り手のそれらにおけるのとは異なることを含意する。これに続く地の文による「徒労」ということばの執拗なまでの反復は、このようなことばのふるえに対する反動と見ることができよう。「徒労」ということばは語り手・島村の言葉の中に定直し直され、駒子及び駒子の言葉は、それに従つて意味付けられることになる。駒子は健気で可憐な女——男の欲望を駆り立てる対象——に鑄直される。単一のコード・文脈の中に静止したことばからなるテキスト前半は、このように島村・語り手の言葉によって安定的秩序を与えられているのだ。

しかし、テキストも中盤にさしかかると、今度は逆に駒子の言葉が島村の自己認識を変容させる程の強度をもって立ち現れてくる。

「ねえ、あんた素直な人ね。素直な人なら、私の日記をすつかり送つてあげてもい

いわ。あんた私を笑はないわね。あんた素直な人だと思ふけれど。」

島村はわけ分らぬ感動に打たれて、さうだ、自分ほど素直な人間はないのだといふ気がして来ると、もう駒子に強ひて帰れとは言はなかつた。(70)

停車場での別れの場面である。先に「徒労」を例に見た、同一語の繰り返しというレトリックが、ここでは駒子の台詞において見られることは注目に値する。繰り返しにより意味作用を高められた「素直」ということばが——その影響力は「わけ分らぬ」と隠蔽されているが——、島村の自己意識の転換をもたらしている。但し、「島村は」という表現が明示するように、この一文において語り手は島村との間に距離をとっているため、物語世界内で発話された言葉の影響力は作中人物・島村の意識のレベルに留まっている。〈他者の言葉〉が地の文を攪乱するのを見るのは、テキスト後半を待たねばならない。

ここで第二章末尾の引用に戻ろう。「あの時」とは対照的に、「真面目なこと」ということばは駒子のコード・文脈と語り手・島村のそれらの間で揺らぐ。その揺らぎは、語り手・島村の駒子と行男の関係についての認識、さらには駒子の見方のみならず、言葉そのものを相対化する。また、駒子のまなざしと投げつけられた栗が島村のまなざしと身体の超越性を脅かすとき、語り手・島村の言葉の優位もまた揺さぶられている。そしてこのような動揺は、テキストに散りばめられた「真面目」²¹ということばを介して、テキスト全体をふるわすだろう。ことばの蓄積を通して、テキストは遡及的な意味変容に開かれる——これが同一語の反復の、もう一つの効果である。

テキスト後半にはこのようなことばのふるえが多数見られるが²²、中でも最も深刻な動揺をテキストにもたらすのは「女」ということばである。

「さうね。ちよつと悪い評判が立てば、狭い土地はおしまひね。」と言つたが、直ぐ顔を上げて微笑むと、

「ううん、いいのよ。私達はどこへ行つたつて働けるから。」

その素直な実感の籠つた調子は、親譲りの財産で徒食する島村にはひどく意外だった。

「ほんたうよ。どこで稼ぐのもおんなじよ。くよくよすることない。」

なにげない口振りなのだが、島村は女の響きを聞いた。

「それでいいのよ。ほんたうに人を好きになれるのは、もう女だけなんですから。」

と、駒子は少し顔を赤らめてうつ向いた。

襟を透かしてゐるので、背から肩へ白い扇を拵げたやうだ。その白粉の濃い肉はなんだか悲しく盛り上つて、毛織物じみて見え、また動物じみて見えた。

「今の世のなかではね。」と、島村は呟いて、その言葉の空々しいのに冷つとした。

しかし駒子は単純に、

「いつだつてさうよ。」

そして顔を上げると、ぼんやり言ひ足した。

「あんたそれを知らないの？」

背に吸ひついてゐる赤い肌襦袢が隠れた。(104-105)

「私達」とは、表面上は駒子と同様のやり方で生計を立てている人間すなわち芸者ということになるが、続いてこの発言の根拠について「ほんたうに人を好きになれるのは、もう女だけなんですから。」と言っていることから、駒子が「私達」と「女」とを同一視していることがわかる。つまりここで駒子が「女」に与える意味内容は、「どこへ行つたつて働ける」、「ほんたうに人を好きになれる」存在、つまり、豊かな生活力〔生命力〕を持ち、他者を愛することのできる主体なのである²³。駒子の言葉は、駒子の身体を「肉」、物（「扇」と「毛織物」）及び「動物」として描くとともにそこに哀れさの属性を付与することで、駒子の、そしてまた「女」ということばの所有の回復を図る語りに抵抗する。〈他者の言葉〉との緊張関係において自身が孕む欲望を暴露した語りの戦慄は、唐突に駒子の肌襦袢を描写し、さらに引用箇所直後、突然に出来事から離れて舞踊論の翻訳について語る不自然さに、消し難く刻印されている。

こうして、語り手・島村の言葉が依拠していた男-自己-主体／女-他者-対象という階層的二項対立は動揺を余儀なくされる。「女」ということばは、一方的にまなざされ、欲望され、語られる対象を一義的に指示することはもはやなく、読者の聞く「女の響き」は島村の聞くそれと同一ではあり得ない。語りの要をなしていたはずの「女」ということばのふるえは、読者の記憶に堆積していた駒子と葉子の言動、またそれに対する語り手・島村の認識の不完全さや偏向の全てを集約しながら、語り手を脱臼する。したがって地の文の、女を性的或は美的な対象の位置に貶める一方で、自己を唯一の主体として特権化しようとする志向性、及びそのような欲望に基づく作中人物・島村とのホモソーシャルな共犯関係を隠蔽しようとする志向性は、〈他者の言葉〉の妨害にあつて挫折する。地の文の次のような「女の体」ということばの反復も、いまやその志向性をグロテスクに誇張する以外の作用を持ち得ないだろう。

あつと人垣が息を呑んで、女の体が落ちるのを見た。

繭倉は芝居などにも使へるやうに、形ばかりの二階の客席がつけてある。二階と言つても低い。その二階から落ちたので、地上までほんの瞬間のはずだが、落ちる姿をはつきり眼で追へたほどの時間があつたかのやうに見えた。人形じみた、不思議な落ち方のせゐかもしれない。一目で失心してゐると分つた。下に落ちてても音はしなかつた。水のかかつた場所で、埃も立たなかつた。新しく燃え移つてゆく火と古い燃えかすに起きる火との中程に落ちたのだつた。

古い燃えかすの火に向かつて、ポンプが一台斜めに弓形の水を立ててみたが、その前にふつと女の体が浮んだ。さういふ落ち方だつた。女の体は空中で水平だつた。島村はどきつとしたけれども、とつさに危険も恐怖も感じなかつた。非現実的な世界の幻影のようだつた。硬直してみた体が空中に放り落されて柔軟になり、しかし、人形じみた無抵抗さ、命の通ってみない自由さで、生も死も休止したやうな姿だつた。島村に閃いた不安と言へば、水平に伸びた女の体で頭の方が下になりはしないか、腰か膝が曲りはしないかといふことだつた。さうなりさうなけはひは見えたが、水平のまま落ちた。(138-139)

テキストの末尾付近、雪中火事の場合からの引用である。後に葉子であると明かされる「女の体が落ちる」ことがここで語られる出来事の全てであり、引用第二・第三段落はともに「女の体」が宙に浮いてから地面に落ちるまでの一瞬を、ことばを幾重にもして描出している。第二段落は出来事から音と時間を奪い去り、「女の体」の落ち方に「人形じみた、不思議な落ち方」という象徴的・抽象的な表現を与えるとともに、「女の体」の質量を無化する。第三段落はこの落ち方をより詳しく描くことでその象徴性を高める。「女の体」を、弓形に注がれる水を背景に「浮」ぶ「無抵抗」な「人形」と物化し、「生も死も休止したやうな姿」と時の経過から疎外する。出来事をことばによって美的経験に昇華するこの過程において、「女」の一語はもはや障害でしかない。「女」という、駒子と葉子の主体性を含意してしまうことばによって女を美的・象徴的イメージの構成要素に回収することは、不可能なのだ。「の体」という二字は、「女」という語の指示対象を欲望され、見られ、語られる対象に限定・固定するために付されている。このような危ういバランスの上に構築される「非現実的な世界の幻影」は当然脆く、駒子の声と身体動きが回復する音声と時間によって、また「女」ということばを通して傾れ込む複数の言葉の葛藤によって、亀裂を入れられる。雪中火事が、ホモソーシャルな欲望を内面化した島村のまなざしと語り手の言葉によって再構成されたイメージであることは、落下する「女の体」の美しい水平さを損なうまいとする島村のまなざしの偏向の露出と、引用の後三度も繰り返される「同じ瞬間のやうだつた」(139-140)という表現によるあまりにあからさまな時間遡行によって、殊更に強調されている。駒子の叫びが島村にもたらす「冷たい痙攣」(139)は、語りの動揺と連動しているのだ。

この雪中火事の場合、は、「女」の一語によって美的・性的な対象を一義的に指示するとともに、駒子と葉子をそのようなものとして語り得ていた夕景色の鏡の場面(11-12)と著しい対照をなすばかりか、夕景色の鏡の記憶を自ら喚起しそれに覆い被さることによって、冒頭からここに至るまでの語り全体を相対化する。ここで強調されるのは、島村が想起する「駒子との年月」及び彼が抱く「苦痛と悲哀」と読者にとってのそれらとの差異であり、夕景色の鏡及びそれを現出した語り手・島村の言葉の虚構性である(140)。

したがって、先行言説が繰り返し指摘してきた夕景色の鏡と雪中火事という二つの場面の照応関係は、単なる等質的・静的な「枠構造」²⁴などではなく、一方が他方を遡及的に変容させるという動的な螺旋構造をなすと言える。二つの場面に枠付けられた『雪国』というテキストは、〈他者の言葉〉が語りを崩壊させる過程をこそ提示しているのだ。

4. ことば／言葉の強度、文体と身体

『雪国』の文体論的特徴として、台詞すなわち〈他者の言葉〉の実体化、及び地の文との著しい対照が指摘され得る。第一に、それは「…は…と言った。」といった表現で地の文に囲い込まれることが稀である。つまり、地の文に語られる客体としての側面より、自ら語る主体としての側面を強調されている。第二に——当然第一点目とかかわることだが——それは表現上の技巧や意味内容・意味作用よりもむしろ音声的側面を強調されている。この点は「駅長さあん。」(9)「島村さあん、島村さあん。」(30)「佐一郎う、佐一郎う。」(97)「おうい。おうい。」(133)といった呼びかけや、「はあい。」(11)「ほうい。来てちやうだあい。」(133)といった応答、「ああつ、駒ちやん、」(67)「ふう、苦しい。」(99)「ふふふ、可笑しいな。」(101)「ふう、いい気持。」(106)「ほんたうにいやあな気がした。」(119)「くやしい、ああつ、くやしい。」(120)といった感情や感覚の発露に顕著である。そのようなことばは発話者の身体性を必然的に伴う上、語りのそれとは異質な時間性をテキストに発生させる²⁵。言い換えれば、作中人物の身体と物語世界の時間を、語りの支配から解放する。さらに台詞は、技巧や意味の方に主眼のある地の文と並置され、対比されることによって、互いを際立たせ合う。地の文の所謂〈美しさ〉は、簡潔素朴な台詞との対照において可視化されるのだ。

ことばの身体性と時間性はこのように〈他者の言葉〉の強度を高めるが、それは形式的側面からのみの効果ではなく、ここに物語内容の分析と物語言説の分析を有機的に接続する契機がある。本稿が繰り返し仄めかし、その度に理論化を先延ばしにしていた点であるが、台詞がいかなる強度を獲得するかは、物語世界内における発話者と受話者の身体のありようとかかわっている。駒子・葉子の言葉が語り手・島村の言葉に匹敵する強度を持つとき、そこには多くの場合彼女らの島村に対するまなざしがあった。さらに彼女らの身体は質量と体積を持って現れ、島村の身体に作用する。台詞はまた、読みの過程で蓄積した記憶を喚起し、集約することによって、自らの意味価を増大させる。台詞の豊かな表現力が、語り手・島村の物語を相対化する一方で、自己すなわち駒子・葉子の物語の存在を示唆する。「君はいい女だね。」という島村の言葉に激昂して涙を流すとき、駒子は「女」ということばを性的対象——テキスト全体を通して語り手・島村が共犯的に構築してきた「女」そのもの、駒子が「私はさういふ女ぢやないの。」(33)とその属性を繰り返し拒否した、まさにその「女」——という意味に定位してしまっている(120)。反動的なことばの揺り戻し、言葉の秩序付けがテキスト上で起こり得るのは、

「ほんたうに人を好きになれるのは、もう女だけなんですから。」と言うとき、駒子が「顔を赤らめてうつ向いた」からなのだ。

以上から推論されるのは、文学テキストにおける、作中人物（『雪国』の場合は島村）の身体、地の文の語り手の身体及び地の文の身体としての文体、そしてテキストの身体としての文体の密接な関係である。駒子の叫びが島村の身体を「冷たい痙攣」に打ち震わすとき、地の文も同じくそれに襲われるかのように多くの亀裂を孕んだ。つまりここでは、「あの時」という地の文のことばが駒子の体を赤く染めたのと逆のことが起こるのである。地の文の痙攣を、その語り手或は書き手の身体のそれに投影し得るのか、また、地の文と台詞の緊張・葛藤・争闘が織りなす動態——そしてこれは作中人物の身体、すなわち物語世界内における複雑な人間関係のありようと有機的に結びついた重層的動態となるだろう——としてのテキストの身体＝文体は、その叙述者、すなわちテキストの書き手・ことばの操り手としての川端康成の身体といかなる関係にあるのか、といった考究すべき課題は多々ある。しかし、この問題系がエクリチュールの身体性に繋がること、それが地の文と台詞、視点人物或は主人公とその他の作中人物の間にある語る-語られる、見る-見られる関係の問い直しなくしては論じられないことは、明らかであるように思われる。そしてここにまた、他者論及び広義のジェンダー論——関係的かつ階層的に負わされる、二項対立的属性の問題化——との接続可能性が垣間見えるのである。テキストの文体論的分析、特に台詞という、地の文によって語られる対象でありながら、同じくテキストを織りなすことばとして地の文と対峙するという意味で非常に特異なことばへの注目には、未だ尽きせぬ方法論的意義があるのだ。

5. おわりに

「ああ ああ、痛た、いたたつたあ、いたたつた、いたたつた、ああ、ああ。」おしっこをする時に痛むのである。苦しい息も絶えさうな声と共に、しびんの底には谷川の清水の音。(10) ²⁶

このあまりに有名な一節を『十六歳の日記』という川端の〈処女作〉²⁷から突如引いても、それと〈代表作〉〈成熟期の傑作〉たる『雪国』との断絶が感覚されることはもはやなかろう。二つのテキストが共有する文体論的特徴については多言を弄するまでもない。台詞は実体化され、音声的・身体的側面を強調される。讚美的となった「しびんの底には…」という一節が、台詞との並置・対比によりその雄弁な表現力を獲得していることを、讚美者は徹底的に見落としてきた²⁸。「写生」という、作者・川端が『十六歳の日記』が文学作品たり得る所以と語り(42-43)、二次的言説の多くが批判するにせよ賞賛するにせよ前提としてきた²⁹日記の書き手の叙述態度³⁰は、まずもってこのような意

味での台詞の写生である³¹。『雪国』の文体を形作っていた重要なファクターたる地の文の引用表現——「あの時」に見られる自己引用と「真面目なこと」に見られる他者引用——がここではよりあからさまに、執拗に繰り返され、それらのことば／言葉は語り手の心理・感情に作用するのみならず、身体的な反応さえ惹起するものとして語られる³²。日記の書き手という、地の文の語り手の極めて特殊な一形態が〈自己の言葉〉及び〈他者の言葉〉と取り結ぶこのように直接的な関係を、『雪国』の地の文の語り手に敷衍することは許されるのかという警戒も、それが島村という作中人物とコード・文脈を共有していること、またテキストの大部分において二者の距離が極めて近く、知覚や認識のずれが示されることはない一方で、言表行為の主体の存在感が強く、語り手の時間軸こそがテキストを支配していることを考えるならば、要らぬ心配と思われよう。〈他者の言葉〉の写生と引用により他者性を抱え込んだ日記は、本来モノログであるはずでありながら、それを後に思いがけず発見し読むという語り手の行為において、それ自身が〈他者の言葉〉として現れる。過去の日記には、「私が微塵も記憶してゐない」(35) 日々が記されており、いくら再解釈を施して(語りの現在の)〈自己の言葉〉に回収しようとしても、そこに息衝く〈他者の言葉〉は時にそれを拒み³³、語り手はその〈他者の言葉〉を通して「記憶の中の祖父の姿よりも醜」(35) い祖父に出会うのだ。『十六歳の日記』は『雪国』と同じく、複数の言葉の動的相互作用の場なのである。

恐らく川端文学の独我論的閉鎖性や対象の物化への批判³⁴は、川端テキストにおいてことばがことばと取り結ぶ関係、言葉が言葉と取り結ぶ関係の観点から精緻化或は再検討されねばなるまい。ことばは、「あの時」と「真面目なこと」のそれぞれが、また同一語の使用が『雪国』においてそうであったように、時に〈自己の言葉〉を強化し〈他者の言葉〉を排除し、テキストを単声的にする一方で、時に〈他者の言葉〉を志向し、〈自己の言葉〉を脱臼させ、テキストに多声性をもたらすのだから。文体論的分析はまた、テキストに蓋をし読みを思考停止に追い込んできた作者の〈才能〉〈天性〉〈素質〉といった紋切り型³⁵、及び〈新感覚派〉をめぐる言説とそこでの川端康成の位置づけを問い直す契機になるかもしれない³⁶。いずれの方向性を採るにせよ、川端テキストの潜在的可能性は未だ汲み尽されていないように思えるのだ³⁷。

註

¹ 以上の認識は、『マルクス主義と言語哲学』(桑野隆訳 改訳版 未来社 1989年)、『ドストエフスキーの詩学』(望月哲男・鈴木淳一訳 筑摩書房:ちくま学芸文庫 1995年)、及び『小説の言葉』(伊東一郎訳 平凡社:平凡社ライブラリー 1996年)におけるミハイル・バフチンの議論から多大なる示唆を受けて得られたものである。なお、本稿は、ひとまとまりのことばが依拠する特殊具体的なコード・文脈及びそれらを支える志向性を問題にする際には「言葉」、テキスト上の物質的顕現、或は未だコード・文脈及び志向性を確定されぬ中立的状态にあることばを

指す際には「ことば」の語を用いる。しかし当然ながらこれらは明確に区別できるものではない。読みの行為の過程で、「ことば」は「言葉」の一部となる——あることばが濃密なコノテーションと強力な志向性を持って立ち現れてくる——からである。

- ² 代表的なものに柄谷行人「歴史と他者」(『終焉をめぐる』講談社:講談社学術文庫 1995年)。但しこれは杉浦明平「川端康成——(5)『雪国』」(『現代文学総説Ⅱ 大正昭和作家篇』学燈社 1952年)、寺田透『『雪国』論』(『近代文学』1953年4月)など、同時代評に既に見られる批判の延長上にあると言える。
- ³ 作者・川端も『雪国』を「どこで切つてもいいやうな作品」とみなす発言をしたことがある(「あとがき」『雪国』岩波書店:岩波文庫 1952年)。
- ⁴ 武田勝彦、長谷川泉「英訳『雪国』の発表当時の紹介と評価」(『川端文学——海外の評価——』早稲田大学出版部 1969年)が典型的である。
- ⁵ 「夕景色の鏡」(『文藝春秋』1935年1月号)、「白い朝の鏡」(『改造』1935年1月号)、「物語」(『日本評論』1935年11月号)、「徒労」(『日本評論』1935年11月号)、「萱の花」(『中央公論』1936年8月号)、「火の枕」(『文藝春秋』1936年10月号)、「手鞠歌」(『改造』1937年5月号)、「雪中火事」(『公論』1940年12月号)、「天の河」(『文藝春秋』1941年8月号)、「雪国抄」(『暁鐘』1946年5月1日創刊号)
- ⁶ 青野季吉「文学と方法——川端氏の『徒労』に就て」(『読売新聞』1935年11月27日)など。
- ⁷ 『雪国』の研究史については、林武志『川端康成作品研究史』(教育出版センター 1984年)を参考にした。
- ⁸ ①は「視点人物が対象について十分の知識や知覚を持たないことを示す推量形や疑問系」(「物語めいた興味が先きに立つたのかもしれない。」(14)など)、②は「対象への凝視・詠嘆という形で、別の現実沈潜する部分」(「つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさ」(12)、「女の心はそんなにまで来てあるのかと、島村は暫く黙り込んだ。」(65)など)、③は「視点人物の見る世界と見られる現実の世界とが触れ合う接点」に現れるところの、「知覚の未完や欠落の切れ続きの合間に、予期しない現実の進行に会ったゆえの驚きを表す表現(「ふと」「ふつと」、「急に」「突然」、「途端」、「思ひがけなく」「意外の」「不意に」、「不思議な」「異様に」、「驚いた」、さらに頻出する「かへつて」など)である(『川端康成の文体——『雪国』と『山の音』』『文体論研究』1968年11月)。なお、これ以降指示のない限り、『雪国』本文からの引用は全て『川端康成全集第十巻』(新潮社 1980-1984年)による。
- ⁹ 田村充正の議論は、このような単純化の典型であろう。ここにおいては、地の文の志向性、及びそれが三人称を装う理由は論じられぬまま、『雪国』というテキスト全体が島村の(詠嘆)すなわちモノローグに回収されるとともに、歌物語や俳諧といった日本の伝統的文学ジャンルに接続される(『『雪国』は小説なのか——比較文学試論』中央公論事業出版 2002年)。これに対し本稿は、(バフチンの議論を参照することが必然的に含意するように)あくまでも『雪国』を小説——複数の言葉が錯綜する、多声的な散文テキスト——とみなす立場をとる。

¹⁰ 「救済としての文学——『雪国』とその仏訳について——」『現代文学』1984年6月 39頁

¹¹ 前掲注10 42頁 なお、傍点は中山による。

¹² 前掲注10 54頁

¹³ 前掲注8 14, 21-22頁

¹⁴ 小森陽一、川端香男里、中山眞彦 [ほか]「シンポジウム 川端康成『雪国』の表現をめぐる」『文体論研究』2000年3月

¹⁵ 前掲注14 89-90頁

¹⁶ この点と表裏をなす問題点を、参照した先行研究のそれぞれについて指摘できよう。まず、根岸が具体例として挙げる表現のほとんどがテキスト前半からの引用であり、テキストの全体像を捉えるに十分とは言えない。また、中山は地の文の言表行為の主体と作者・川端を同一視し、川端の自己「救済」の試みにテキストを還元している。台詞を含む、テキストを織りなすことばの総体を統御する叙述者のレベルを欠いたこのような分析は、駒子を「言葉の繁茂」に溶解する、すなわち〈他者の言葉〉を閉却する結果、テキストを「観念的放蕩」に貶めざるを得ない(53頁)。さらに、「葉子の見る主体としての位置を不在化させる」という地の文の欲望を『『雪国』の欲望』とみなすとき、小森は地の文とテキスト全体を同一視してしまっている(90頁)。語りの志向が完遂されること、テキストが一枚岩的・単声的なものであることが無媒介に前提とされているのは、このためである。

¹⁷ テキストの書き手としての川端康成にとって〈他者〉であると言っているのではないということをお断りしたい。テキスト上の全てのことばを統御する叙述者のレベルの分析・考察を経ることなしに、ことばをテキストの書き手に結びつけることの問題性は、既に指摘したところである。複数の言葉の葛藤の場としてのテキストのどこに作者の言葉が求められるかは、容易に決定できるものではない。その意味で、駒子・葉子の言葉の方を安易に〈他者の言葉〉と言い切ることは問題があると考え。また、当然ながらこれは極めて単純化した二項対立である。語り手が島村との距離を恣意的に選択している以上、地の文と島村の台詞及び心内語の間にも、コード・文脈のずれが存在すると言わねばならない(このずれが顕在化しているのが、テキスト冒頭の「娘」という呼称をめぐる語りである(11))。しかし本稿は、欲望と志向性の共有をこそ重視し、二つをまとめて駒子と葉子の台詞＝〈他者の言葉〉と対置した。また、駒子と葉子の台詞を一括りにすることにも、その内的多様性を無化する危険性が伴う。本稿はこれを自覚しつつ、しかしやはりこの二項対立が有効であると信ずる。駒子と葉子のコード・文脈及びその背後にある自意識が極めて似ている一方で、島村・語り手のそれらと大きく隔たっていることは、今後のテキスト分析で明らかにできるだろうからだ。

¹⁸ 飯田祐子『彼らの物語——日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会 1998年

¹⁹ 前掲注2 柄谷 243-244頁

²⁰ 例えば佐藤譲助『『雪国』の構造——現実と非現実——』(『言文』1977年10月)、袁葉『『雪国』における「徒労」』(『山陽女子短期大学研究紀要』1994年3月)、吉田達志「徒労に賭ける愛

——川端康成『雪国』論（『静岡近代文学』2007年12月）など。

- ²¹ これ以前では17, 18, 19頁、これ以後では135頁に「真面目」の語が見られる。
- ²² 本文で論じたもの以外に、「散る」と「複雑」(95)、「あさましい」(107)、「気ちがひ」及び「気ちがふ」(53, 63, 112, 114, 115, 140)がある。
- ²³ 「女一人くらみどうにでもなりますわ。」と言い、行男への愛情を繰り返し強調する(110-111)葉子も、この意味での「女」としての自意識を駒子と共有していると考えられる。この自意識の共有が、駒子・葉子の言葉を語り手・島村の言葉と対置されるものとして一括りにする根拠の一つである。
- ²⁴ 前掲注2 寺田、磯貝英夫『『雪国』の写生』（武田勝彦、高橋新太郎編『川端康成——現代の美意識』明治書院 1978年）、川崎寿彦「夢か現か幻か——『雪国』と鏡像の美学」（長谷川泉、鶴田欣也編『『雪国』の分析研究』教育出版センター 1985年）、前掲注14 小森など。
- ²⁵ ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール——方法論の試み』花輪光、和泉涼一訳 水声社 1991年
- ²⁶ 本稿は、『川端康成全集第二巻』所収の『十六歳の日記』をテキストとし、本文からの引用は全てこれに従う。本文の変遷、原日記への疑義や〈二七歳の日記〉説と作者・川端の応答といった書誌的観点からの重要な論点は尽きないが、『十六歳の日記』の作品論を志向するものではない本稿は、それらを棚上げし、川端テキストにおけることばのふるまい、ことばとことばの関係のありようを考察する一つの契機としてのみ扱う。なお、テキストにおける語りの重層性は、本稿の議論とともに以上の論点にもかかわるが、ここでは①日記の書き手である十六歳の少年、②過去の日記を書きし註釈する語り手、③『十六歳の日記』という作品を上梓する作者・川端の三層を想定し、①及び②と③との間の連続性は前提としないこととする。日記部分及び「あとがき」をテキストとみなし、「あとがきの二」は作者・川端の自作コメントとして扱う。なお、書誌については岡本和宜「川端康成「十六歳の日記」本文考——「あとがき二」の問題」（『皇學館論叢』2004年6月）を、研究史については前掲注7を参考にした。
- ²⁷ 作者・川端が「あとがきの二」で「私が発表した作品のうちでは最も古い執筆」だと述べており(37)、作品受容も基本的にはこの発言に従ってきた。
- ²⁸ 伊藤整「川端康成の芸術」（『文芸』1938年2月）など。
- ²⁹ 磯貝英夫「十六歳の日記」（『川端康成の人間と芸術』東京：教育出版センター 1971年）、登尾豊「「十六歳の日記」と「故園」その他」（『川端康成研究叢書1』東京：教育出版センター 1976年）など。
- ³⁰ 「机に向かつて原稿用紙を拡げ」「所謂親密な話を聞かうと用意する」少年の態度は写生的であると読めるし、過去の日記を書きする第二レベルの語り手も、「（私は祖父の言葉をそのまま筆記しようと思つたのです。）」と同様の解釈を書き加えている(24)。
- ³¹ 小菅健一「「十六歳の日記」試論——〈処女作群〉論の前提として——」（『山梨英和短期大学紀要』1996年12月

- ³² 「しかしもう私の頭には、「毛物が食べてゐるのだ。」と云ふ言葉が刻みつけられて離れぬ。」(14)、
「しかし、「腹の中の毛物が飲食してゐるのだ。」と云ふ、この言葉は私の体ぢうにくつついてゐた。」(15)、「お祖父さんに恩返しすると思ふて——私はこの言葉ですつかり満足した。／学校へ
出た。学校は私の樂園である。学校は私の樂園。——この言葉はこの頃の私の家庭の状態を最も
適切に現してゐはしまいか。」(16) など。
- ³³ 祖父の言葉に対して、「(何のことだか分かりません。)」(24) と理解不可能性が表明されている。
- ³⁴ 松浦寿輝「見ることの閉塞」(『新潮』1992年6月)、近藤裕子「視覚の揺らぎ——川端康成の〈目〉」
(『臨床文学論』彩流社 2003年)、Nina Cornyetz, *The Ethics of Aesthetics in Japanese Cinema and Literature: Polygraphic Desire* (Routledge, 2007.) など。なお、この種の批判が多くの場合川端文学における視覚性の問題化から発していることは、注意しなければならない。
- ³⁵ 『十六歳の日記』は特にこれらと結びつけられる傾向が強い。典型的なものは伊藤整「川端康成の芸術」(『文芸』1938年2月)。また、川端の新感覚派理論へのかかわりの稀薄さについては中川成美「新感覚派という〈現象〉」(『モダニティと想像力：文学と視覚性』新曜社 2009年)
- ³⁶ 『十六歳の日記』の先に引用した部分是新感覚派的手法の先取りと評価されることがある。長谷川泉「『十六歳の日記』」(『国文学』1968年9月)が代表的。
- ³⁷ 仁平政人は、彼の最新の川端研究書『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』(東北大学出版会 2011年)において、〈新感覚派〉〈日本的〉といった川端文学の看板を一旦外し、川端康成のことばとのかかわりをテキストに立ち戻って精査することによって、そのありようと「二〇世紀モダニズム」という文脈の相互関係、及びその営みの中で〈日本的〉〈伝統的〉といった作品・作家への評価と作家自身の自己規定が生成・定着していくさまを明らかにしている。テキストの具体的な分析から、テキストの書き手・ことばの操り手としての川端康成を再検討しようという根本的問題意識を共有する仁平の議論から、本稿は少なからぬ教示を受けている。『雪国』の分析はなされていないものの、仁平による各テキストの分析は示唆に富んだ。仁平が主に『雪国』等の「代表作」の影に隠れがちな短編作品の分析を通して構築した議論に、本稿が、敢えて「代表作」の側から、接続できていることを願う。

